



あの頃

さわぶ・なかば

川のすぐそばに住んでいた。

雨の日が続くと水かさが増し、上手から勢いよく流れてくる色んな物体。

時折、フナを狙ってシラサギなど大きな鳥たちもやってくる。

この川は四万十川とは比べものにならない、ちっぽけな川。

まだ見ぬ地に思いを馳せつつ、「あつよし」の中に自分の暮らしを重ねていた。

幼さとか貧しさとか、内にひそむ漠然とした不安のような塊、あるいは家族についての言葉にできない思いなど「わたし」に共通する弱みを、この本に代弁してもらっていたのかも。

テレビでみる自分と同じ年の小学生は、拭い去れないイメージをこちらに焼き付けながらも遠いものとして存在していた。

友達であるとかきょうだい、親、学校の先生、毎日接する人間が正真正銘本物だけれど、このお話はそれだけでは足りない刺激と知識の栄養素となって小学生の「わたし」を支えてくれたのだ。

当時はそんなこと全く意識していなくて、吸い込まれるように読み進めていたに過ぎないけれど。

『四万十川』は共感オンリーでなく、未知な事柄をそっと教えてくれる、リアルなお兄さんだったのかな。

それもドキドキさせたり、キレイな言葉で魅惑したり。

現実的だけれど別世界のような不思議な魔法を使って子どもの心にすっと入ってきた。

登場人物たちが方言で話すのにも親近感がわく。

東京の小学生じゃないんだ、わたしたちは。

と、どこかで強く意識していた。

素直に表現できない気持ち、隠さなきゃいけない思いつき、ひょっとすると劣等感になっていたかもしれないしこりを、上手くトトロ溶かしてくれた。

あま〜いソースなんかじゃなく、土台を支える固いビスケットとして間違いなく、わたしの人生に影響を与えた一冊がこっそり隠れている。

## 影響を与えた一冊

<http://p.booklog.jp/book/48649>

著者 : nakabasawabu

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/nakabasawabu/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48649>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48649>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.